令和五年度新宿区夏目漱石コンクール　わたしの漱石、わたしの一行

高校生の部　最優秀賞

「社会学者・夏目漱石」

北鎌倉女子学園高等学校　二年　秋山　美萌

作　品　名『吾輩は猫である』
選んだ一行　自分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して苦しい苦しいと云うのは自分で火をかんかん起こして暑い暑いと云うようなものだ

漱石は至高の文学者であると同時に優れた社会学者でもある。それは随筆や評論の中に色濃く、或いは各方面から請われて行った講演で、文学論を論じるよりも当時の社会情勢を洞察し、鋭く指摘するような話が多かったことからも窺える。明治四十四年、「現代日本の開化」と題されて和歌山で行われた講演では、当時の文明開化の最中にあった日本社会を分析眼を持って俯瞰し、一般聴衆に分かりやすく説明した。漱石はこの講演で「開化が進めば進むほど生活は困難になる」と指摘したが、百年以上経った現在、この発言はみごとなほど現実味を帯びている。

また、文学作品では、登場人物の人格を借りて世相を語ることもあったが、「吾輩は猫である」などの代表作でも社会学者・夏目漱石が顔を見せる。一人称の語り口で書かれてはいるものの、猫というフィルターを通しているがゆえに安心して社会を批判することができたのかもしれない。特に第六話の冒頭は、猫・吾輩による人間社会の見方・捉え方の独演会である。その中で私が、否応なしに注目せざるを得なかったのは「自分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して苦しい苦しいと云うのは自分で火をかんかん起こして暑い暑いと云うようなものだ」という一行だ。

私はこの感想文を八月初旬に書いている。ここはエアコンが効いていて快適に保たれているが、一歩外に出れば体温を超える気温が身の危険を感じさせる。漱石は、人間が自分勝手にものをつくって困っているとして、今私たちが直面している状況を見事に言い当てた。豊かさのバロメーターとして捉えられてきた物質主義は、製造物そのものが、また生産過程で放出される有害物質が地球を汚染し続けている。日本は地震大国であるが、津波などの要因を除けば、命を落とす被害者の死因のほとんどが人間が自らつくった構造物によるものである。また、比較対象として使われた言葉ではあるが、自分で火を起こして暑がっているとも言う。ただ、人間活動の物質的文化を支えているのは電力であり、それをつくり出すにはどうしても大量の火力が必要なのである。工場のラインで組み立てロボットを動かすのも、自動車で移動するのも火力に頼らざるを得ない。漱石の指摘通り、最早人間は火を起こさねば生活を維持できなくなってしまっているのだ。窓の外では、茹るような暑さの中、元来陽光が好きなはずの植物の葉が項垂れているようすに我が目を疑う。

漱石が生きたのは明治時代、今と比べればまだまだ地球はありのままの姿であったろう。それでも、社会の変化に敏感に反応して先の先の時代まで見通せている。これは、漱石が人間の内面を鋭くえぐることができ、人間の行動はそういった内面の心理によって突き動かされた結果であるからに他ならない。私たちは漱石を別の視点で学び直すべきだ。社会学者・漱石の文章や発言は、人間の心理を掴み、時代を超えて普遍性を持つのだから。